

# きもちは、 言葉を さがしている



## 第58話

水野 スウ

### ともに平和を歩きたい

ハナミズキが咲き出した4月のある日、心の病気を体験した人たちの働く場所、そして居場所でもある調布のレストラン・クッキングハウスで、22年目のお話会「スウさんのピースウォーク」をしました。平和を真ん中に語る、この場所でのいつものピースウォークとはちょっと違って、今年は、私たち親子にとって大切な、大きな存在だったはったんのこと——去年亡くなられた編集者であり作家でもあった松田悠八さんと出会ってからの52年を語りました。クッキングハウス代表の松浦幸子さんがつけてくれたタイトルは、「ともに平和を歩きたい」。

出版社に勤めていたはったんは、半世紀を超えるおつきあいの中で私の7冊の本を編集してくれた人です。出会いは私がアメリカから戻ってすぐの1973年のこと。日本を離れるまでTBSラジオの永六輔さんの番組「誰かとどこかで」に詩を書いていたので、赤坂の放送局に帰国の挨拶に行ったのです。

すると永さんから、いま何したいの？と聞かれて、当時の私は若さゆえの怖いもの知らずだったんでしょ、即答で、書きたいです！と。それで番組のディレクターさんが、編集者であるはったんを私に紹介してくれたのでした。

「はったん」という呼び名は、初対面の日に私がつけたあだ名です。名前の「八」の由来が、お姉さんのたくさんいる8人きょうだいの末っ子だからと知って、7つ年上だけど少年みtainな目をした話しやすいような松田さんに、思わず、はったんって呼んでいいですか、って聞いたのでした。

### これ、本にしましょう

書きたかったのは、アメリカを去る直前まで約ひと月かけて、オートバイのお尻に乗ってもらってアメリカ大陸を横断した物語と、そこに至るまでのアメリカでの日々。はじめて会ったばかりのはったんにそのことを夢中で話していると、「試しに書いてきて」と。

次に会うまでに原稿用紙10枚くらいを書いて持

っていくと、はったんはすぐに目の前で原稿に目を通し始め、ドキドキしながら待っていた私に、読み終わるなりこう言いました。「これ、本にしましょう」。そうやって生まれた、私とはったんの第一作目が『セントラルパークの詩』<sup>うた</sup>です。

ちょうどこの本が出る頃、私は結婚して夫の生まれ故郷の金沢へ引越しました。生まれも育ちも東京の私にとって、北陸の町では見るもの聞くもの、すべて初めてのことばかり。市場に並ぶ、冷凍の切り身じゃない魚の種類の高さ、はじめて見る顔の野菜たち、知らない料理、庭ではじめての野菜作り、お初に会う野菜の花たちに驚いたり、感動したり。思わず書き留めずにはおれない小さな発見の一つ一つは、時に詩になり、やがてエッセイになっていきました。

そのうち、はったんの勤めている出版社から出ている「いつかどこかで」という雑誌に、私は一日一行の詩の歳時記を連載するようになりました。それが一年分たまった頃、はったんがまた「これ、本にしましょう」。しかも今回ははったんのアイデアで、全編手描きの文字と私が描いたイラスト付きです。

まだFAXもない時代、原稿やイラストは全て郵送か手渡しでした。東京に行く用事ができた時はそのたびに、銀座の喫茶店で会って打ち合わせ。こう

してできたのが、手描き文字とイラストで綴る365日の詩の歳時記、『てのひらごよみ』という本です。

こんなやり取りを重ねながら、娘が生まれるまでの8年間に、はったんとは6冊の本をつくったのでした。

### スウ、一体どうしちゃったの？

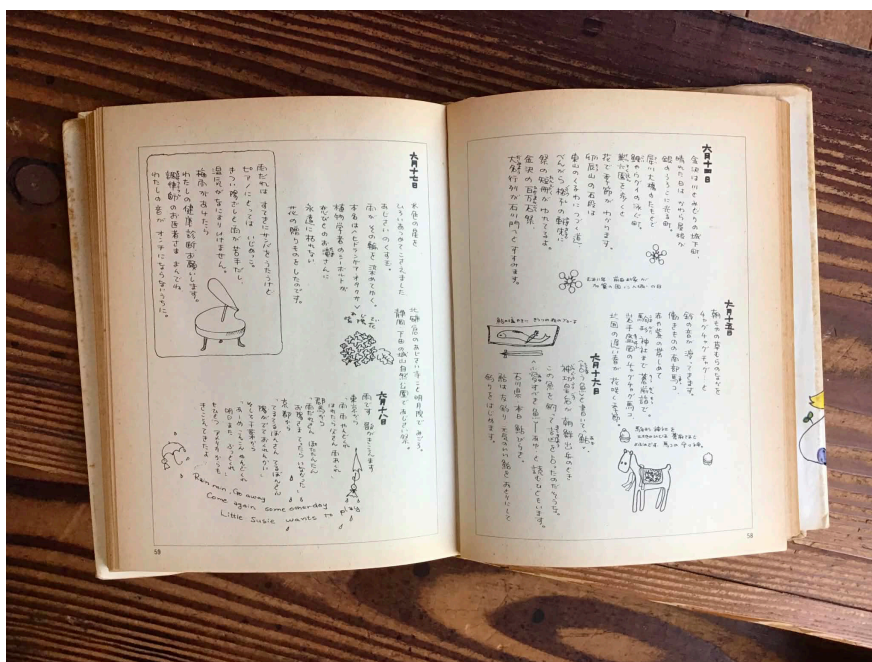
1982年に娘が生まれ、子育てで大忙しになると、はったんとの本づくりは一旦ストップ。今みたいに赤ちゃん連れで出かけていけるところがそんなにたくさんはなく、それまであちこちに取材に出かけていた自分が、突然ちいさな命と、ちいさなマンションで日中は二人きりの生活。仲間と出会いたいなあ。そうだ、自分が外に出ていけないなら、家に来てもらおう！

そんなわけで、娘が0歳の時、自宅で週に一回ひらく「紅茶の時間」をはじめました。毎週水曜日の1時から6時まで、赤ちゃん連れのお母さんどなたでもどうぞ、と呼びかけると、ぽつぽつと人が来るようになり、気づけば、ちいさなマンションの我が家はさながら、週に一日だけ親子でにぎわう未満児保育園のようでした。

紅茶の時間を開いて数年経ったある日——それはたしかソ連のチェルノブイリで大きな原発事故が

おきて1年した頃と記憶しているけど、紅茶に来た誰だったかが、能登にも原子力発電所が建てられようとしているんだよ、と教えてくれました。しかもそれはチェルノブイリの事故が起こった後、日本ではじめて新設される原発だということです。

その時まで私は、原発について何一つ知らなかったの、何か得体の知れない恐怖に突き動かされるみたいなザワザワした気持ちになって、次から次へと本を読み、いろんな講演会に出かけていっては、



そこで聞いてきたことを紅茶で熱く仲間に語って……そんなふうにして原発のことを知っていききました。

私はそれまで、道端の小さな草や花や、暮らしの中で見つけたすてきと思うもの、思うことをずっと文章にしてきました。そんな私の目の前にいきなり出現したとてつもなく大きくて、よくわからないもの。だけど知ってしまったらそれを伝えずにはおれない私が出て、「いのちの未来に原発はいらない通信」というミニコミで（今も出している「いのち通信」の原点）毎号毎号、原発のことを書くようになりました。はったんとは娘が生まれてからなかなか会う機会がなかったけど、突然そんな通信を送りつけて、それを読んだはったんは、あんなかわいい文章を書いていたスウが一体どうしちゃったの？と、私の突然の変わりようにびっくりしたみたいでした。

今思うと、あの頃の私は原発を知らせるのに夢中で、読む人のこと考えてなかった。原発は悪いもの、国も電力会社も悪い、と決めつけて、誰かを責めるような口調で通信を書いていた気がします。

そんな私の伝え方が変わったのは、この日お話しさせてもらっているクッキングハウスとの出会いがきっかけでした。人にも自分にも気持ちのいいコミュニケーションの方法があること、自分を主語にして語ることの大切さを学んで、私の語り方や書き方が少しずつ変わっていったのです。

はったんは、スウ、どうしちゃったの？と感じた後も、それでも私との縁を切らず、ずっと通信を読み続けてくれていた。私らしい伝え方にたどり着くまでの年月、はったん、よくぞ我慢してつきあってくれていたよね、と思います。

私がクッキングハウスと出会った翌年の2000年に、埼玉の川越でも紅茶の時間が始まりました。娘が生まれてからなかなかはったと会う機会がなかったけれど、川越紅茶をきっかけに、もしかしたらまた会えるようになるかも。そんなきもちではったんにお知らせを出してみたら、その第1回目から足を運んでくれて。はったんは、女の人たちばかりの紅茶にずっと自然に馴染んで、以後、川越紅茶になくて

ならないメンバーになりました。女の人たちがいっぱいおしゃべりしあいながら元気になってくのがいいなあ、こういう場って大事な、とリスペクトもしてくれていた。川越紅茶ができたおかげで、私もはったとリアルで会って話す機会がぐんと増えて、それは本当にとてもうれしいことだったのでした。

### 一人じゃつくれなかった

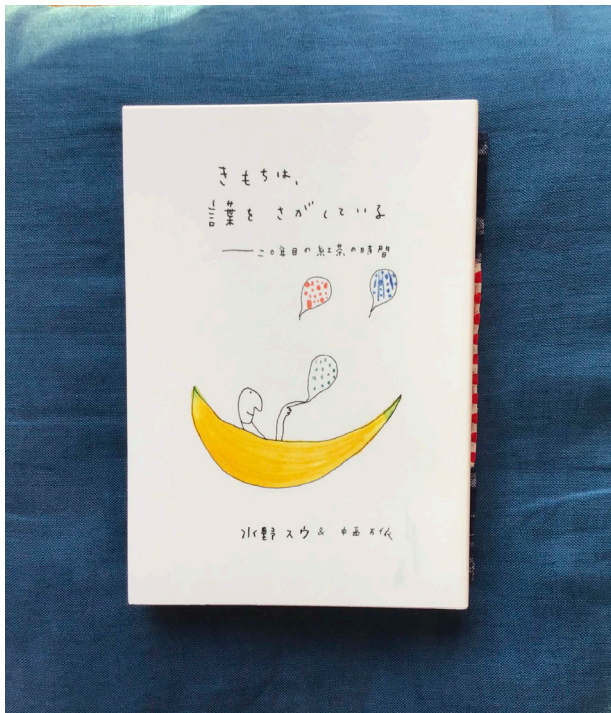
お姉さんの大勢いる環境で育ったからか、はったんは女性の本を担当することが多かったようです。アン・モロウ・リンドバーグの『海からの贈りもの』（落合恵子さん訳・立風書房）、メイ・サートンの『わたしの愛する孤独』（同じく落合さん訳・立風書房）も彼の編集でした。

1981年にはったんが編集して、のちに100万部のロングベストセラーとなる『パパラギ——はじめて文明を見た南海の酋長ツイアピの演説集』（岡崎照男さん訳・立風書房）。この本は同じ岐阜出身のフォークシンガー、笠木透さんの目に留まり、笠木さんはこの本にインスパイアされて、パパラギソングをたくさん書いて歌いました。

チェルノブイリ原発事故で被災した村を撮った本橋成一さんの写真絵本『アレクセイと泉のはなし』（アリス館）もはったんの仕事でした。

川越紅茶で再会し、出版社を退職してフリーになってからののはったんに、私は紅茶20年目の本の編集をお願いしました。娘が生まれてからはったんとは本をつくっていなかったの、20年ぶりののはったんと書き下ろしの本づくりです。全体としては紅茶の本なのだけど、どうしても書きたかったのは、今まで誰にも話してこなかった、私が生まれた家の家族の物語。それをはったんに託したかったので、編集をお願いしたのでした。

はじめて私という個人をさらし、自分と向き合っただけのプライベートなことを書くのは、とても苦しい作業だった。そして実感したのでした。この本は一人じゃつくれなかった。はったんがもしいなかったら、はたして最後まで書き上げられていたろうか。はったん、本当によくぞ私と出会ってくれたね。これまでちゃんと気づけてなかったけど、書き手の私に常



に伴走してくれていたはったんの存在を、改めて深く感じたのです。

こうして『きもちをさがしている』が2004年に本になり（マガジンの連載のタイトルもこの本からきています）、クッキングハウスの松浦幸子さんにお渡ししたところ、読みましたよ、この本の話をしにきてください、と出前のご注文をいただきました。その年からクッキングハウスで年に一度の私のお話会が始まり、それが今に続いているというわけです。

### 編集という仕事

はったんは娘の人生にも、それとなく何気なく、だけでもとても大きな影響を与えた人です。その転期は2008年。川越紅茶で、「あなたが言われてうれしかった言葉はなんですか？」と問いかけるほめ言葉のシャワーのワークショップをした時のこと。初めて参加したはったん、ワークの体験がとても新鮮で楽しかったようです。そして私の手元にそれまでの参加者さんたちの書いた言葉がたくさんあると知ると、「わあ、もったいない、それマイちゃんに本にでもらってよ」とその場で提案してくれました。大学を出た後の娘が細々と手づくり冊子を出してい

たこと、見てくれてたんですね。

娘はデザインだけ担当するつもりで気軽に引き受けはしたものの、実は当時ところが苦しくなって、引きこもっている時期でした。これからつくろうとする本で伝えたい「そのまんまの自分でいい」なんてこと、本人は全然思えてなかった。しかも、たくさん言葉が届いたとき、自分とは違うキラキラした世界のように思えて寂しくなってしまうみたいです。

自分に嘘をついてカタチだけ整えた本はつくれない、どんな本にしたなら最初の読者である自分に届くか、どんな言葉の並び方、どんなレイアウトであればさびしくならないだろう。娘はうんと悩んで、考えて、言葉を選んで、『ほめ言葉のシャワー』の冊子をつくりました。そういえば、大学生の頃だったか、はったんから「マイちゃんは編集に向いていると思う」と言われたことがあって、そのときはピンとこなかったけど、この冊子をつくるその過程すべてが、本を編集するということがあった、と娘はずいぶん後になって気づいたそうです。この1冊から始まって、娘は今も編集という言葉のばんそう（伴走、伴奏）に関わり続けています。

この冊子を出したことでクッキングハウスの松浦さんから、今度は親子でお話に来て、とご注文があり、そのおかげで娘は憲法13条の意味——私もあなたもとりかえのきかない、たった一人の大切な存在だよ——を発見しました。ああ、このまんまの自分で私、生きてっていいんだ。やっとそう思えるようになったきっかけを、はったんは娘に、おそらく意図せず、贈ってくれていたのだね。まさしく、思いがけず利他、で。

### 3分の憲法語り

クッキングハウスでのお話会後半では、3月に金沢であったばかりの「ピースウォーク金沢2026」のことも少し話しました。クッキングハウスのお話会皆勤賞のはったんは、そんな話も私からきくと聞きたいんじゃないかなと思って。

ここ数年、ピースウォーク金沢には誰もが自由に話す持ち時間3分のオープンマイクタイムがあって、



えようとする人たちが次々出てきてマイクを持ちました。心臓バクバクさせながら、勇気振り絞って、前に出てきてくれたんでしょう。言葉に詰まったり、泣きそうになったりする人を、周りで見てる人たちが応援する、励ます。そんな人びとの姿を見ながら、この場がまるで、2月の衆院戦から続く高市さんの政治や言葉やふるまいで傷ついた人たちの、図らずもケア、手当ての場になってるかのようになって感じました。それと同時に、政府のやり方にNOと声をあげる手段、手立ての場にもなっていたような。手当てと手立てのデモ。そんなふう感じたのははじめての感覚でしたよ。

### 私は何を、どんなふうに

はったんと出会ってからの52年間で語ることは、図らずも、私がこの52年で何を、どんなふうに、何のために伝えてきたのか、私自身の表現史を語ることもありました。そのスタート地点に立ち会い、半世紀もの間、ずっと見守り続けてくれたのがはったんだった。そういうひとがいるって、なんて心強くて安心なことだったろう。

2018年に、笠木透さん（「パパラギ」の歌をたくさんつくった笠木さん、実は私がクッキングハウスと出会う前から、松浦さんやクッキングハウスと深くつながっていた人なのでした）を偲ぶ大きな舞台でのパパラギコンサートがあって、その直前に受け取ったメールにははったんはこう書いてくれています。

「最初の頃の本で、スウさんは花や草木の詩をたくさん書きました。小さいいのちたちを愛おしむ作品だった、その気持ちが光っていた。そうして最も近い命、マイちゃんを授かった頃に能登半島で奇妙な施設の建設が始まったんだよね。それはいのちに最も遠い、いのちの反対語のような原子力発電所だった。スウさんは直感的に、それが山川草木<sup>さんせんそうもく</sup>+花鳥（もちろん人間も含む）の命を脅かすものだとわかって、いのちみら通信を発行し始めたよね。

ほら、だからあの詩作が大好きだった頃のスウさんと今のスウさんは一直線に繋がってる――

いのちを愛おしむ、という姿勢において、ね。そのことを伝えたかったのです。書くようにゆっくり話す、話すようにゆっくり書く。それもスウさん親子から僕が学んだこと、なのです。じゃあね、パパラギコンサートでは、みんなが語るように歌いますよ」

いつときは、スウ、どうしちゃったの？と戸惑っていたはったんだったけど、いつしかこんなふうに感じてくれていたんだね。はったん、この日のクッキングハウスでのお話も聴いてくれていましたか。きっと聴いてくれていたよね。

### この日の特別ゲスト

遠い日の、銀座の喫茶店での打ち合わせが終わった後のはったんのこと、今もはっきりと思い出します。さっきまでのお仕事の顔とはなんだか違う、ちょっと恥ずかしそうに、でもめっちゃめっちゃ嬉しそう顔でこう言ったこと。「あのね、僕、今度結婚するんだ」。

そのお相手のまあちゃんが、50年後のこの日、クッキングハウスではったんがいつも座る席に座って、私とはったんの物語を聴いてくれていました。

『きもちは、言葉をさがしている』が出たのと同じ2004年に、はったんは自分を育てたふるさと長良川を舞台にした自伝的小説、『長良川～スタンドバイミー一九五〇』（作品社）を書き上げました。以後、長良川3部作となる『円空流し』（富山房インターナショナル）『長良川～修羅としずくと女たち』（作品社）を出版、続いて『カミオカンデの神さま』（ロクリン社）というヤングアダルト向けの小説も。編集者のはったんは、ふるさとを描く作家さんになったのです。

『長良川～スタンドバイミー一九五〇』は長いこと映画化が試みられていましたが、ついに昨年、この本を原作にした映画「光る川」が完成しました。その映画を、はったんがまあちゃんや息子さん、娘さん、そのパートナーと一緒に映画館に見に行き、そのあと、家族のお食事会で感想をシェアしあった日の様子、はったんのFacebookで私はリアルタイ

ムで読んでいました。満面の笑みで幸せいっぱいのはったんがそこにいた。一年前の春の日のこと。

今年のお話会には、45年の時を経て新しく生まれたばかりの絵本『ツイアビとパパラギ』もたくさん積まれていました。出版したイマジネーション・プラスの乙部雅志さんが持ってきてくれたのです。

はったんはかつて自分が編集で関わった『パパラギ』を、今度は子どもたちにも読んでもらえるよう、自分の言葉であらためて絵本にしたい、そのときは乙部さんに頼みたい、と強く望んでいました。

この絵本をつくっている途中ではったんは旅立ってしまったけれど、後を託された乙部さんと編集担当さん、そして絵を担当した、世界中を旅しながら壁画を描いているこのルルさんの三人とで、この絵本を通してはったんさんが子どもたちに伝えなかったことってなんだっただろう、と何度も何度も話しあって、この絵本が生まれたのだそうです。(私を通してはったんという呼び名を知った乙部さん、さすがに大先輩に“さん”をつけずには呼べなくてこう呼んでいると言っていました)

はったんに『きもちほ、言葉を探している』を編集してもらって「この本はひとりじゃつくれなかった」と実感した私だったけど、パパラギの絵本こそまさに、はったんの願いを受け取ろうとする人がいなければ、生まれることはできなかった。見えない

バトンがリレーされて絵本というかたちになったのです。

南の島に住む「ぼくら」ツイアビのもとに、ある日、足のゆびさきまでたくさんの布きれでからだをかくしたパパラギたちがやってくる。ぼくらは追い返そうとしたんだけど、パパラギたちがタイコをテテンと叩いたから、ぼくらはタタンと返した。そうして互いにとって大切なことを教え合うようになったけれど――

「ねえ、パパラギ。いろんなことをしているあなたたちなのに、なぜたいせつなことをえらべなかったの?」「たいせつなことはいつもそばにある、ということ。ぼくたちはそれをわすれてはいけない」

ツイアビの言葉が、今にぴったりと重なる気がします。この絵本を多くの人に知ってもらえたら、特にこどもたちにこの絵本と出会ってもらえたら。それって、はったんとともにこれからもずっと平和を歩いていくことになるんじゃないか。この日のクッキングハウスで初めて「ツイアビとパパラギ」の絵本を手にした時、はったんから託された新しいバトンが今ここにある、そんなふうに私は思ったのでした。

2026.5.26

